



Title	〈図書紹介〉『映像学原論』 植条則夫著 ミネルヴァ書房, 1990年
Author(s)	伊藤, 弘
Citation	デザイン理論. 1991, 30, p. 143-144
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52832
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

図書紹介

『映像学原論』

植条則夫著

ミネルヴァ書房，1990年

今日の映像の領域は、われわれの生活や社会、さらには文化的にも大きな役割を担っている。既存の学問領域とも多くの接点を有し、芸術、デザインの分野とも密接な関係性を保っているといえるだろう。様々な技術的基盤を背景とするこの分野は、技術開発の急速な発展とともに常に変貌し、その領域を拡大し続けている。こうした状況は、映像に関する研究にも当てはめることができ、その研究、調査活動は様々な側面から展開されており、各方面の研究分野とも領域を共有しているものも少なくない。本書は、映像研究に関する分野の細分化、拡大化を現状として捉えたのちに、今一度原理的探求に立ち返り、今日における映像の諸問題を分析、映像の本質を解明するとともに、これらの体系化・統合化を試みたものである。

本書は、映像に関する研究に携わった様々な研究者の論考によって構成されており、執筆者の所属機関も、芸術学、社会学といった領域から民間の研究機関、さらには実際に制作活動に関与している作家まで、多岐にわたった編集が行われている。執筆者の中には、本学会の吉岡俊夫会員、豊原正智会員がそれぞれ、第三章、第十一章の執筆を担当しており、専門の分野に関する基本的原理を探求している。

吉岡氏は、第三章『映像の特質』で、映像そのものの概念規定の困難さに触れたのち、その形成のプロセスと、提示の場面の両側面からこの問題に言及している。すな

わち映像とはフィジカルなプロセスによって形成された現実の画像であり、またその画像を再生する装置によって映しだされたすべての像である。その特質とは、対象と映像の類似性であり、常に対象の存在を見えるものに喚起させるが、現に、そこにそれは存在するわけではない。見ている映像は、対象の光学的特性の機械的な抽出であり、フィジカルなプロセスによって形成された対象のひとつの属性にしかすぎない。しかしそのプロセスがもたらす類似性ゆえに、現実との距離を限りなく近付けようとする特質をもつのである。さらに吉岡氏は第3節で、映像の提示の場面における問題を、映画における事実性・虚構性との関係から論じ、映像をめぐる混沌とした状況にひとつの視点を提示するのである。

一方、豊原氏は第十一章『記号としての映像と言語』で、映像を記号として問題にし、具体的な模像性を基盤とする映像表現と、抽象性、一般性を基盤とする言語表現を比較しながら、両者を通底する創造性の本質に言及している。模像としての映像の記号化の最初の契機は、対象の限定と提示、さらにはそれがカメラ自身の機械性によって一定の質が与えられることにある。こうした一連の過程において映像が記号としての機能をになう原理を「模像の形式化」とし、映像の特質のひとつであるとする。言語における形式化、文節化の原理がその一般性、抽象性を基盤にしているのに対し、映像の具体性、特殊性は記号化において

様々な「不自由さ」をもつ。言語もまた、言葉という素材がすでに概念を担っており、ある種の「不自由さ」を前提としているが、こうした言葉の一般性を克服することにおいて、映像においては模像の一般的提示を克服することによってそれぞれ表現の独自性が生まれるとするのである。共に記号としての成立の鍵は、いかなる「特殊な形式化」が行われるかにある。こうした表現主体の意識的な形式化が、模像性を基盤にしながらも社会的、文化的制度の枠内ですでに構成されている意味を越えて新しい意味を担う記号としての映像を構成する可能性に、さらには映像形式に内在的な非制度的な意味作用によって現実の制度的な意味体系とのずれを生じさせる可能性につながることが考えられる。豊原氏は、映像における形式化を言語におけるソシュールの指摘、ラングとパロールの関係性に対比させながら、制度的に構成された構造に「沈澱しない」意味を担う記号の形成にこそ映像の創造的表現があることを指摘するのである。

著書の構成は、映像概念に対する基本的な考察から、各論に移行してゆく編集が行われている。冒頭で編著者が述べているように映像研究とは、まず「映像」という概念規定を明確にすることから始まっているといえるだろう。特にコンピュータに代表される電子メディアの台頭以降、映像メディア自体が大きな転換期を迎え、非常に複雑かつ広範な領域にまたがって現実に機能しているわけである。編著者は今日の映像を、単に現実の技術的複製としての疑似体験や代理体験といったレベルをはるかに越えた、人間の視覚をシュミレートするシステムとして総体的に捉え、映像が今後ま

すまず社会の中で重要な役割を担うであろう展望を予測する。進行形である急速な技術的發展により、より一層錯綜した状況の展開が想定できるからこそ、領域を網羅できる原理や本質論の必要性があるわけである。本書は、社会的、文化的文脈における映像のあり方を探るひとつの指針として、「映像学」という学問領域を体系化してこうと試みたものであるといえるだろう。

最後に参考までに本書の目次を引用しておく。

- 第一章 映像の概念と映像研究の特色
- 第二章 映像メディアの歴史—アプローチのための試論
- 第三章 映像の特質
- 第四章 映像メディアの種類と特性
- 第五章 映像と現代芸術
- 第六章 映像表現の創造原理
- 第七章 映像の批評をめぐって
- 第八章 高度情報社会と映像文化—映像の「保存—蓄積—継承」という問題をめぐって
- 第九章 ジャーナリズムとしての映像
- 第十章 映像広告の機能と発想
- 第十一章 記号としての映像と言語
- 第十二章 映像情報と創造的思考
- 第十三章 映像ソフト産業
- 第十四章 ホログラフィーとその意味
- 第十五章 映像における表現の自由と倫理
- 第十六章 映像著作権の諸問題

(伊藤 弘 京都工芸繊維大学)